

ウィルクス事件とバークの『現在の不満』（下）

岸 本 広 司

**The Wilkes Affair and Burke's  
*Present Discontents* (Part II)**

**Hiroshi Kishimoto**

**Summary**

The principal aim of this paper is to examine the significance of Burke's *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*.

In his pamphlet, Burke describes the importance of political party and insists on its value. It was a bold step, for party was almost unanimously despised in the eighteenth century. Party was still mostly used in a pejorative sense to suggest something narrow, selfish and unpatriotic. But Burke changed this low estimation of party and saw in it the only sure defense against the crown's offensive. He welcomed it as a device necessary to responsible government and advocated it as something conducive to the public good. Burke's defense of party in *Present Discontents* is an important landmark in the advancement of modern party government.

Received April 30, 1993

Key words : Edmund Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, political party, party government.

**三 『現在の不満』（2）——主として政党論をめぐって——**

1770年版の『ポリティカル・レジスター』（*Political Register*）は、『現在の不満』が刊行された直後に次のような記事を掲載した。

「最近の政治的作品の中でも、このパンフレット〔『現在の不満』〕ほど広く受け入れられ、積極的に買い求められたものはない。政治の問題に少しでも関心のある人ならば、ほとん

どすべての者がそのパンフレットを持っている。2, 3 週間のうちに第 3 版まで印刷された。著者であるエドマンド・バーク氏の名声は高まっている。今後さらに版を重ねることであろう<sup>(1)</sup>。」

すでにこの記事が明らかにしているように、『現在の不満』は刊行直後から注目され、非常に好調な売れ行きを示した。6 週間のうちに 3261 部も印刷・発行されたと言われている<sup>(2)</sup>。バークの友人 C・オハラ (Charles O' Hara) は、5 月 10 日付バーク宛書簡でこう述べた。「貴方の作品ほど熱心に読まれ、高く賞賛されているものはこれまでにありません。ほとんどの人はその内容を理解していませんが、それを読むのが流行になっています<sup>(3)</sup>。」そしてバークも、その返信の中でこう語っているのである。「我が党の綱領を盛り込んだこのパンフレットは、予想以上に公衆に受け入れられています<sup>(4)</sup>」と。

しかしながら、このように世間から注目され、相当な売れ行きを示したことは間違いないとしても、内容の評価という点では必ずしも一様ではなく、また芳しいものではなかった。むしろ多方面からの厳しい批判に晒されたというのが実情であった。そしてそうした批判の中でも、最も手厳しいのが急進主義者からの批判であった。例えばバークは、前出のオハラ宛返信の中で先の言葉に続けてこう述べている。「宮廷派の者は、『現在の不満』を紳士的な論駁書として受け止めています。しかし共和主義者たちは、凄まじいまでの敵意むき出しでそれを批判しています<sup>(5)</sup>。」実際、バークが共和主義者と呼んだ急進主義者たちの批判は厳しかった。我々は、その一例として、有名な共和主義的歴史家で、「権利章典支持者協会」の有力なメンバーである J・ソーブリッジ (John Sawbridge) の妹、C・G・マコーリ (Catherine G. Macaulay) の次の言葉を引用することができよう。

「この有害な書物〔『現在の不満』〕の明白な意図は、国王の権威によってのみ支えられている不道德な宮廷派の徒輩が、憲法で認められた自由に抗して危険な計画を立てていることを暴露することである。けれどもこの書物は、複雑でしかももっともらしい話題で民衆を欺こうとしている。それは、腐敗した利己主義的な原理に立脚し、またそれに依拠している貴族的党派の危険な策略である。……この書物では、社会的自由の束縛は無視されているばかりか、それを終らせるというよりも、むしろ維持されるべき必要悪と看做されている。……我々は、この著者の心が墮落し、その考えが欺瞞で満ちているのに驚かざるを得ない。彼は、専制が議会に由来しているのを熱心に説いてはいる。しかし、権力を民衆の手に戻すことについては、選挙を頻繁に行なえば恐ろしい無秩序が生起し、独立的な紳士たちが国庫お抱えの人間たちと 3 年毎に抗争するようになるという浅薄な理由から断固反対しているのである<sup>(6)</sup>。」

ジョージ三世が即位し、ウィルクス事件が勃発した 1760 年代は、一般にイギリスの急進主義運動の始期と言われている<sup>(7)</sup>が、ここに取り上げたマコーリ夫人や「権利章典支持者協会」の面々は、短期議会制や選挙制度の改正といった急進的な議会改革案を提唱し、活発な運動

を展開していた。しかし『現在の不満』のバークは、そうした急進的な改革案に対して否定的もしくは消極的であった。というのも彼は、すでに我々が見てきたように、王政、貴族政、民主政の三要素が抑制均衡した伝統的なイギリス憲法体制の擁護者であって、微妙な均衡の破壊に繋がる恐れのある改革案を認めることなどおおよそできなかったからである。確かに彼は、民主主義的原理を肯定するような記述を随所で行なっている<sup>(8)</sup>。しかしバークは、政界に登場する以前から決して民主主義者ではあり得なかった<sup>(9)</sup>。彼は民主主義の進展には極端なまでの警戒心を抱いており、それ故にマコーリ夫人は、保守主義的色彩の濃い『現在の不満』を無視することなど決してできなかったのである。「ロッキンガム卿の守備隊長 (governor) であるバーク氏は、1冊のパンフレットを公刊したが、このパンフレットは、ロッキンガム派と権利章典支持者協会との間に決定的な意見の不一致をもたらした<sup>(10)</sup>」とH・ウォルポール (Horace Walpole) は述べている。ウォルポールのこの指摘は正しい。議会改革をめぐるバークおよびロッキンガム派と急進主義者たちとの間の意見の相違は、『現在の不満』の刊行によって鮮明となり、両派の対立的図式は確定的なものとなったのである。

『現在の不満』が出版されて約4ヶ月後の8月中旬、バークはR・シャクルトン (Richard Shackleton) 宛書簡で急進主義者を非難してこう述べている。

「最も不愉快な徒輩は、ある党派の中の腐敗しきった連中です。彼らは暴力や軽率な振る舞いによって、またしばしば邪悪な行為によって我々に計り知れないほどの危害を加えてきました。私が言っているのは、我が党のすべての者に宣戦布告した……権利章典支持者協会の連中のことです<sup>(11)</sup>。」

このようにして、『現在の不満』は議会改革案めぐって急進主義者の側から厳しい批判に晒された。しかし、それを論難したのは単に急進主義者だけではなかった。チャタムもまた、『現在の不満』に批判の刃を向けている。なぜならば、急進主義者ほどではないにしても、チャタムも議会改革案に理解を示しつつあったからであり<sup>(12)</sup>、しかもそのこと以上に、『現在の不満』における政党政治の主張そのものが、チャタムの考えとは真っ向から対立するものであったからである。すなわち、チャタムはあらゆる党派を嫌ってその解消を目指していた。それは、諸党派が対立すれば、国家の安全や国民の自由は必ずや危険に晒されることになると思われたからである。しかしバークの考えは、これとは全く反対であった。国家の安全や国民の自由を守るためにこそ、政党は存在しなければならないのである。バークは名指して非難することは避けながらも、明らかに政治的結合を嫌悪するチャタムの態度を念頭に置きながら、政党に加わろうとしない政治家を論駁して次のように述べている。

「国家共同体における信託に預かる人間にとっては、単に祖国の繁栄を念願しているというだけでは充分ではない。彼個人としては従来一度も悪しき行為を行わず、常に自らの良心に照らして投票し、祖国の利益に害を及ぼすと懸念されるような企図に対して、その都度必ずこれを弾劾する熱弁さえふったという経歴もまだ決して充分ではない。弁解の

計画の如くに映るこの無邪気な人畜無害の性格は、公務遂行の上では惨めなまでに頼りないものである。公的義務は要求し要請するものである。正しい事柄は単に世に明らかにされるだけでなく、世に行なわれなければならぬことを、また悪しき事柄は摘発されるだけでなく、必ず打倒されなければならぬことをこの義務は要求し期待する。公的な人間が自らの義務を効果的に果たし得る状況〔＝政党〕に進んで身を置くのを怠るのは、彼が自らの信託を正式に裏切るのとほとんど同様、信託の目的に反する怠慢に他ならないのである<sup>(13)</sup>。」

バークのチャタム批判は勿論これだけではない。彼は、「人ではなくて政策である」(Not men, but measures) というチャタム愛用のスローガンを取り上げ、その合言葉が、「多くの民衆があらゆる名誉ある連繋に踏み切るのを妨げる呪文のような効果を發揮している<sup>(14)</sup>」として、それを手厳しく批判している。もっとも、バークはチャタムを敵に回すのを恐れてここでも名指しで非難するのは避けている。しかしこれも明らかにチャタムを念頭に置いた批判であった。そしてそれに対してチャタムは、70年11月15日付のロッキンガム宛書簡で、『現在の不満』を反批判してこう述べているのである。「あのパンフレットは、意図するところは立派ではありますが、広範な公衆の大義を大変傷つけました。全体のみが、宮廷派の危険な陰謀に対して全体を救うことができるのです<sup>(15)</sup>。」

急進主義者やチャタムから論難された『現在の不満』は、さらにはウォルポールからも槍玉に挙げられた。我々は、彼の回想録から次の文章を引き出すことができよう。「エドマンド・バーク氏は、4月23日に『現在の不満』と題された大部で詳細なパンフレットを刊行した。それはロッキンガム派の宣言書として書かれたものであり、ロッキンガム派の見解、その政治綱領、彼らが野党となった動機、飽くことなく取り上げようとしている問題の論点、そして注意深く監視しようとしている政府の行動等が述べられている。それは創意、雄弁、学識といった大きな利点を持ってはいる。しかしそれとともに散漫かつ緻密でありすぎ、事情をよく心得ている者には退屈、そうでない者には難解な作品となっている。さらにこのパンフレットは、判断力を全く欠いており、そのため著者は有徳な政治家 (statesman) としても、技巧に富んだ策士 (politician) としても評価されていない。……このパンフレットは、民衆に二重内閣という漠然とした考えを示しただけである。……それは無知の故なのか、それとも片寄った考え方の故なのかはわからないが、現在の不満の原因を探るに当たって、バーク氏は決して十分な探究を行っていないし、不満を鎮めるための効果的な方策も提示し得ていない。彼の書物は、憂鬱になるような多くの真理を含んではいる。しかし問題の本質に迫って、不満の原因を明らかにすることなどおおよそできていないのだ<sup>(16)</sup>。」

さてこのようにして、『現在の不満』は多くの同時代人たちからさまざまな批判を受けた。そして『現在の不満』の冒頭部分が明らかにしているように、バーク自身も多方面から非難されるであろうことを充分覚悟していた。その点で、バークの予想は的中したと言うべきで

あるが、しかしこのパンフレットは、我々が後ほど見るように、政治思想的に大きな意義を有し、また19世紀のウィッグ系の歴史家たちに多大の影響を及ぼしたのであった。例えばT・E・メー (Sir Thomas E. May) は、ジョージ三世の権力増大を説明するに際し、バークの二重内閣制の理論をそのまま継承しているし、またW・E・H・レッキ (William E. H. Lecky) は、国王の影響力増大の結果を説明するに当って、バークの叙述をほとんどそのまま引用しているのである。彼らはそれぞれ次のように述べている。

「国王は閣僚たちから全権力を奪取し、それを自ら行使しようとした。そしてそのために彼は、ビュート伯とあらゆる党派から引き抜かれた秘密の顧問団に助勢を求めた。彼らの大多数はトーリー党で、大権についての考えはジャコバイト的であった。……王の目的は、ある党派を排除してそれを他のものに代えることであった。そしてそれとともに、王に忠実で、王の個人的な願望を重要視し、王の政策を遂行して王の意志に従属する新しい党派を作ることでもあった。この新しい党派は、やがて『国王の部下』あるいは『国王の友』として目立つ存在となった。王は責任能力ある閣僚の助言に耳を傾けないで、『二重内閣』すなわち『内面的内閣』に相談して事を進めるようになった。……閣僚たちは、何をするにしても国王の支持に依存するようになり、しかもそれはごく普通のこととなった。彼らは、今や行く手を阻まれて不利な状態に追いやられていた。そしてそれまでは自分たちのものであると思っていた官職も、気がつくや国王の新しい追随者とその関係者に配分されていた<sup>(17)</sup>。」

「国王の影響力は、政治的結合 (connections) を着々と解体してそれらの間に軋轢をもたらした。それは議会政治を破滅の危機に陥れた。そして国内と植民地の双方で、ブランスウィック家が登位して以降ほとんど例を見ないほどの大きな政治不信を引き起こし、議회를軽蔑の対象とし、国民に恐るべき災いをもたらしてしまった<sup>(18)</sup>。」

このように、バークが19世紀のウィッグ系の歴史家たちに与えた影響は甚大であった。しかしながら、今世紀の中葉になると、『現在の不満』に対する評価は大きく転換した。周知のように、ネーミア学派による痛烈な批判である。すなわちネーミア学派によれば、『現在の不満』で展開されたバークの所説は虚偽や曲解に満ちており、それらはことごとく退けられるべきであった。けだしバークは利己的で攻撃的な政党政治家であり、「真実に触れようとせず、それを想像力による作り話と取り替えがちな哀れな観察者<sup>(19)</sup>」でしかない。バークの著作は「全く馬鹿げた考え」 (arrant nonsense<sup>(20)</sup>) で充満しており、したがってその二重内閣説も、「無秩序で悪意に満ちた豊饒な想像力の所産<sup>(21)</sup>」以外の何物でもないのである。L・B・ネーミア (Sir Lewis B. Namier) とJ・ブルック (John Brooke) は、二重内閣制についてそれぞれこう語っている。

「バークが論争的なパンフレットで指摘しているような、二重内閣という制度など全く存在しなかった。……しかしそれにも拘らず、それはあたかもジョージ三世についての正し

い見解であるかのように受け止められてきた<sup>(22)</sup>。」

「ロッキンガム派は、反対党としての新しい根拠を見出さねばならなかった。彼らは正当性を持たないものに正当性を与えるために、またその主張に道徳的基礎を与えるために新しい伝説を必要とした。このロッキンガム伝説は、1770年出版のバークの『現在の不満』によって入念に作り上げられた。……彼は大変聡明であったので、古い神話が役に立たないことを知っていたし、新しい神話を作り上げるだけの想像力を十分に持っていた。……彼は内閣の背後に潜む真の権力、すなわち『私的な秘密の陰謀団』を発明した。議会内の徒党を支えているのは、国王の恩寵を独占している宮廷派であった。バークは野党ロッキンガム派の口実として、『二重内閣』と『国王の友』という理論を考案した<sup>(23)</sup>。」

こうして、ネーミア学派にとってバークの二重内閣説は根拠を欠いた架空の物語であった。つまりそれは、野党ロッキンガム派の政治的立場や行動を正当化するための口実であり、想像力を駆使して作り上げられた18世紀の神話あるいは伝説に他ならなかったのである。このようなネーミア学派の二重内閣説批判が、現在ではかなりの程度正鵠を得たものとして受け止められていることはすでによく知られている通りであろう。実際、バークの二重内閣説はその多くが史実に反し<sup>(24)</sup>、あるいは少なくとも、それが宮廷派の極端な邪悪視の上に成り立っていることはおよそ否定することはできないのである。したがって、『現在の不満』はその現状認識からしてすでに問題を孕んでいると言わねばならない。否そればかりか、このパンフレットは、ロッキンガム派の弁護あるいは正当化を意図したものであるという点において、要するに、現下の危機を克服するために全野党の結束を目指しつつ、しかしその中心勢力としてはロッキンガム派を措定し、ロッキンガム派こそが危機を救済して政権を担い得る真の政党と看做しているという点において、ネーミア学派も強調するように、極めて党派色の濃い政治的パンフレットであったのである。バークが他の野党各派よりも、ロッキンガム派こそを真の政党と看做していることは、次のロッキンガム宛書簡からも窺い知ることができよう。

「こうしたこと〔チャタムやグレンヴィルの思惑〕を考えると、私は自分のささやかな計画〔『現在の不満』〕を早く完成させたいと思います。私は彼らの非常に有利な提案を拒絶するのが正当であると考えますし、そのことを我が党の友人や世間の人々に説明する必要があると思います。このことは、我が党の立脚する基盤を示すことによって、つまり、我が党はその構造においても党を構成する人物においても、ベッドフォード派やグレンヴィル派やその他の派閥とはいかに異なっているかということを示すことによって初めて可能かと思えます。こうした派閥は、公的な目的のためではなく、単に個人的な私的利益を促進させるためにのみ結合しているにすぎないので<sup>(25)</sup>。」

バークは強い党派的立場からこのパンフレットを書いていた。その点で、『現在の不満』は先の『前短期政権についての短評』や『「現在の国情」論』と同様に、その意図からして極め

て政治的かつ実践的で、書齋の中で抽象論を展開する純理論的な哲学書のようなものでは決してなかった<sup>(26)</sup>。我々は、『現在の不満』を政治的文脈を無視して抽象的レベルで読むではないであろう。繰り返して言うならば、それはウィルクス事件という特定の政治状況の中で、ロッキングム派のとした政治行動を弁護するとともに、党として今後とるべき立場や理念や方針を指し示したすぐれて実践的なパンフレット、バーク自身の表現を用いるならば、まさに「党〔ロッキングム派〕の政治綱領<sup>(27)</sup>」であり、あるいは少なくとも、「党の綱領を盛り込んだ<sup>(28)</sup>」ものに他ならなかったのである。

しかしながら、たとえ党派的色彩の濃いものであろうとも、『現在の不満』はその内容において、部分的で一時的な政治綱領以上の深みと広がりや永続性を持っている。つまりそれは、ウィルクス事件に触発されて書かれた党の宣伝パンフレットでありながら、同時にそれを超えて、人間と政治に関する洞察と理解を含み、政治思想的に見て大きな意義を有しているのである。とりわけ政党に関する所説には、多大の意義が包蔵されているのである。そのことは後述されよう。確かに、『現在の不満』が多くの過誤を犯していることは否定し得ない。先に見た二重内閣説はその典型であろう。そしてそれ以外にも、ロッキングム派が果たしてバークの称えるほどに優れた人材から構成されていたのかどうか、また他の党派と異なって、それが純粋に愛国的な公共原理に嚮導されていたのかどうかも、実は疑わしい問題として議論の俎上に載せなければならないであろう。しかし我々は、バークの現状認識がことごとく誤っていると考える必要はない。というのも、例えば若きジョージ三世が、ウィッグ優位の政治情勢を一新するために現実の政治に積極的に介入し、内閣や政党の指図を受けることなく自ら国政を指導しようとしたことは疑い得ず、また親政を断行するために、宮廷費を節約して多くの議員を買収し、「国王の友」を自らの周囲に配したこともおよそ否定することはできないからである。したがって、『現在の不満』は多くの問題を孕んでいることは事実としても、我々は、バークを誤った説を捏造する「詐欺師」として安直に片づけるべきではないし<sup>(29)</sup>、『現在の不満』を無価値なものとして放擲すべきでもないのである。ちなみにC・B・コーン（Carl B. Cone）は、この書物を評して次のように述べている。

「1770年は、イギリスの政治史とバークの生涯の双方にとって注目すべき年である。なぜならば、この年に重要なパンフレットが現われたからである。バークの『現在の不満』は、当時の読者向けに書かれたものである。しかしそれは、一時的な政治綱領のための党派的文書以上のものであり、未来に対する深い意味を持っていた。それは政党の本質と効用、およびその必要性を説明しようとした最初の偉大な試みであった。このパンフレットで1770年の政治状況の分析に充てられている個所は、単に歴史の専門家にのみ意味を持つだけである。しかしその他の個所は、政治的自由が存在する限り有意性を持ち続けるであろう<sup>(30)</sup>。」

コーンが指摘するように、『現在の不満』の価値は何よりもまず「政党の本質と効用、およ

びその必要性を説明しようとした」ところにある。このことは、すでに多くの論者によって指摘されてきたところであるが、我々も、この政党の問題に焦点を絞って以下若干の考察を加えておこう。

バークによれば、国王の影響力の増大と宮廷派の跳梁は、我々が前節（本誌第25集）で見たように、君主政・貴族政・民主政の三原理から構成されている伝統的なイギリス憲法体制を危険に陥れている。相互抑制と微妙な均衡の上に成り立つ憲法秩序は崩壊の危機に直面しており、憲法によって保障されたイギリス人の自由も、今や破滅の淵に立たされているのである。もっともバークは、「影響力という名の下に、口当たりはよいが、一層強い力を秘めた形で発展してきた<sup>(31)</sup>」国王権力に脅威を感じながらも、ジョージ三世を個人的に批判することとはなかった<sup>(32)</sup>。また彼は、ビュートを中心とする「宮廷派の陰謀」に激しい批判の刃を向けつつも、ビュート個人を名指しで批判するわけではなく、たとえ批判するにしても、それは人身攻撃的なものでは決してなかった。むしろ彼が問題にするのは、人間個人ではなくして政治の原理であり、この場合は、二重内閣という制度であり組織であった。

「正規の作戦計画が実施に移される場合、真に危険な要素は、そこで行動する個々の人間ではなくしてその制度である。その制度は、単にビュート卿の野心から起こったのではない。彼の野心にうまく適合した当時の状況と、以前から我々のジェントリ階層の中に瀰漫していた憲法に対する無関心こそがそれを生み出したのである。もしビュート卿が存在しなかったとしても、我々は同じ災厄を経験したことであろうし、たとえビュート卿がいなくなったとしても、彼に代わる知恵者や積極的な実行者にこと欠くことはないであろう。したがって、現在の状況から我々を救い得るのは、ビュート卿に毒づくことではなく、宮廷派とその動きに対して毅然たる態度で身を処することなのである<sup>(33)</sup>。」

しかしながら、個人よりも制度や組織こそが問題であるならば、その制度や組織に立ち向かい、肥大化した宮廷の権限を効果的に抑制し得るのも、実は制度や組織に他ならない。つまり宮廷派徒党による二重内閣制を打倒して、憲法をその本来の原理へと回復せしめ、よって国民の自由を確保し得るのは、理念や原則を同じくする人々が結集し、共通の政治目標に向かって一致した行動をとる政党であり、政党政治に他ならないのである。「『現在の不満』は、ビュート卿と彼の秘密の影響力に対して向けられた。……それは、憲法は危殆に瀕しているというロッキンガム・ウィッグの根強い確信を表明した。しかし、ロッキンガム派が攻撃したのはもはや個人ではなくして制度であった。……秘密の影響力の制度、二重内閣制、そして国王の友の問題を解決する唯一の方法は、政党政治を確立することであった<sup>(34)</sup>。」

バークにとって政党は、憲法のバランスを維持し、自由を守る上に極めて大きな役割を果たすものであった。彼は政党の中に国王の専制に対する唯一の確実な砦を見出した<sup>(35)</sup>。彼にとって政党は、良き政治を行なっていくためには必要不可欠な手段であった。その点でバークは、政党と派閥ないし党派が同一視され、あらゆる政党活動が利己主義的で公共善の実現



を阻むものとして軽蔑の対象となっていた時代<sup>(36)</sup>にあって、とりわけ政府に対する反対党 (opposition) が、国家の中に対立と分裂を持ち込むばかりか、国王の選任した大臣に反対を唱えること自体が、不忠と看做されていた時代状況<sup>(37)</sup>にあって、政党および政党政治を自由の道具にしてその保護物として唱導した最初の人物であった<sup>(38)</sup>。

確かに我々は、パーク以前にも政党の価値を認識し、それについて論じた人物が少なからずいることを知っている。その代表的な事例として、我々はまずボリングブルック (1st Viscount Bolingbroke) の名前を挙げることができよう。すなわちボリングブルックは、パークと同様、イギリス憲法を君主・貴族・民衆の利益のバランスを図ろうとする均衡憲法として捉え、憲法の均衡が保たれてこそイギリス人の自由も保障され得ると考えたが<sup>(39)</sup>、ボリングブルックによれば、悪しき政府がこの憲法のバランスを無視して国民の自由を危険に陥れた場合、その政府に対して反対運動がなされなければならない、しかもその反対運動は、目的意識を持って継続的に、かつまた組織的に行なわれなければならないのであった<sup>(40)</sup>。ここに、ボリングブルックにおいて政党が要請される所以がある。「なぜならば、政党のみがこの種の骨の折れる仕事を甘受することができるからである<sup>(41)</sup>。」そしてボリングブルックは、政府に反対して憲法擁護に立ち上がるグループを「在野派」(country party) と呼び、それこそを国民的利益を指向する真の公党と看做したのであった。

「在野派は世論 (voice of the country) によって権威づけられ、共通利益の原理に基づいて形成されなければならない。それは特定の偏見に基づいて結成され維持されるものではなく、ある人々の特殊利益を指向する以上のものである。このようにして結成された政党は、不適切にも party と呼ばれる。それは、特定の人々の言動に従って発言し行動する国民である。それは、我が国の憲法が存在する限り、あらゆる闘争において遅かれ早かれ勝利を収めるであろう。そしてそうした政党が優位を占めることができないならば、我が憲法はいつも危殆に瀕するのであり、このこと以上に明白なことはないのである<sup>(42)</sup>。」

こうしてボリングブルックは、政党の存在とその価値を承認した。その点で、彼の政党論はパークのそれに先行し、政党論の歴史の中で重要な位置を占めるものであった。しかしここで注意すべきは、ボリングブルックにとって政党は、必ずしも恒久的に存在しなければならぬものではなく、むしろ所期の目的を達成すれば、もはやその存在意義を失ってしまうということである。すなわちボリングブルックは、政党が一致団結して「悪しき政府」—— 具体的にはウォルポール政権 —— と対決し、それを打倒して「国民的統合」(national union) の上に新たな政府を樹立し、かくして憲法のバランスを回復すれば、政党はもはや存在する必要はないのである。ただし「政党は政治的悪」であって、「政党の統治は必ずや党派 (faction) の統治に終らざるを得ない<sup>(43)</sup>」からである。つまり公党である政党も、人間そのものが情欲や私的利益に傾きやすい存在であるが故に、私党としての党派に墮する可能性と必然性を常に秘めているのである。したがって、政党はその任務を全うすれば不必要となるばかりか消

滅するのであり、否むしろ消滅するのが望ましいのである。ここから、全政党を終焉させるための政党、最後の政党となるべき政党という<sup>(44)</sup>、いわゆる「非政党的政党」(non-party party<sup>(45)</sup>)の考え方が出てくる。またここから、「非政党的政治」(non-party government<sup>(46)</sup>)という観念も出てくるのである。ボリングブルックは、『政党論』(*A Dissertation upon Parties*, 1733-34)の献辞で次のように述べている。我々は、政党についてのボリングブルックの基本的な見解をここに見出すことができよう。

「この書物は敵愾心をなくさせる試みであり、かくも長きにわたって国民を、初めは破滅的に、最後は愚劣とも思われるほど悩ませてきたあの政党という名前さえをも消滅させてしまおうという試みである<sup>(47)</sup>。」

こうしてボリングブルックは、政党の価値を認めながらも、G・サルトーリ (Giovanni Sartori) が言うように<sup>(48)</sup>、結局のところは「反政党論者」であって、本格的な政党擁護論はバークを俟たねばならなかった。もっとも我々は、D・ヒューム (David Hume) が、「政党間の区別を全くなくしてしまうのは実行できないことであろうし、自由な政体の下では恐らく望ましいことでもなかろう<sup>(49)</sup>」と述べて、ボリングブルックよりさらに一步前進した政党観を持っていることを知っている。しかしヒュームは、政党を積極的に認めたわけではなく、むしろそれを許容し得るものとして、消極的に受け入れたにすぎなかった<sup>(50)</sup>。否、そもそもヒュームは政党嫌いであって、とりわけ抽象的で思弁的な原理に基づく党派に対しては、原理の対立が行動の対立を生むこと必定であるとして、強い嫌悪感さえ示したのである<sup>(51)</sup>。ヒュームは、政党と党派の区別を必ずしも明確にしないままに、党派一般を非難してこう述べている。

「立法者と国家の創設者が人々の間で尊敬されるべきであるのと全く対照的に、分派と党派 (sects and factions) の創設者は嫌悪されるべきであり、憎悪されるべきである。なぜならば、党派のもたらす影響は法のもたらすそれとは正反対だからである。党派は統治組織を転覆させ、法を無力にする。またそれは、互いに援助し合い、互いに防衛し合うべき同国人の間に最も激烈な敵意を生み出す。そして党派 (parties) の創設者をより一層忌まわしいものにするのは、いかなる国においても、党派という雑草が一度根を下ろすと、それを根絶するのは至難の業だということである。党派という雑草は、当然の如く、幾世紀にもわたって繁殖を続け、それが蒔かれた当の統治組織が全面的に解体されない限り、終りを告げるということは滅多にない。それだけではなく、この雑草は最も豊かな土壌において最も盛んに成長する植物である。そして専制的な政体の場合にも、この雑草の害を完全に免れ得るわけではないが、自由な政体の場合の方が党派という雑草はより容易に発生し、より急速に繁茂すると言える。というのは、立法機関のみが、信賞必罰の方針を通じてこの雑草を根絶することができるにも拘らず、党派という雑草は、この立法機関そのものを常に格好の繁茂の場とするからである<sup>(52)</sup>。」

このようにして、ボリングブルックやヒュームの政党論は否定的あるいは消極的であった<sup>(53)</sup>。それに対してバークの政党論は積極的である。「政治的結合は、我々の公的義務の完全な遂行のためには必要不可欠である。……国家共同体は家族から成り立つが、自由な国家共同体はさらに政党からも成り立つ<sup>(54)</sup>」という言葉がそのことをよく示している。そして『現在の不満』以外にも、我々は政党を積極的に評価するバークの言葉を容易に見出すことができるのである。

「政党の対立は、全体として善・悪いずれに作用するにせよ、自由な統治に不可欠なものである。このことは、あらゆる時代の一致した経験によって認められたほとんど疑う余地のない真理である<sup>(55)</sup>。」

「我々は、自由な国土においては複数の政党が必ず存在しなければならないことを知っている。また我々は、このような政党の競争、その対立、その相互的必要性、その希望、その不安等々が、諸政党を代わる代わる国家の権を握る主権者の下へ送り出す発条であることを知っている<sup>(56)</sup>。」

「こうした集会〔ウィッグ・クラブ〕のおかげで、人々は基本原則を失うことなく、むしろ連帯を通して強い力を獲得する。そして互いに競争することによって、それぞれが躍動し、活動的になる。……政党は絶対的に必要である。私は国政に携わるようになって以来、この国では政党が絶対必要だということを常に考えてきた<sup>(57)</sup>。」

我々は、バークがボリングブルックやヒュームとは異なって、政党をいかに重要なものとして捉えているかをこうした引用文からも容易に知ることができるであろう。彼は、「世に政党と呼ばれる方法によって、私は諸君の父祖の憲法を崇拝する<sup>(58)</sup>」と『ブリストル執行官への書簡』(*Letter to the Sheriffs of Bristol*, 1777)で述べているが、バークにとって政党は、伝統的なイギリス憲法体制を前提とするものであり、それ自体、憲法の微妙なバランスを維持し、それによって保障されたイギリス人の自由を守っていく上に欠き得ぬものであった。そして「政党とは、全員の一致したある特定の原理に基づき、共同の努力によって国家的利益を促進するために結合した人間集団のことである<sup>(59)</sup>」という有名な定義が明らかにしているように、バークの考えた政党とは、共通の原理に立脚して、理論的統一性や結束性を有しているものであった。つまりバークは、共通の主義・信条や一致した政策によって結ばれていない政党ならば、国家的利益を促進するために適切な責任ある行動を展開することはできないと考えたのである<sup>(60)</sup>。バークの言う政党が、一定の原理の上に成り立つそれであることは次の引用文からも窺い知ることができよう。

「物事を自由に考える人々は、個々の場合にはそれぞれ別々の考え方をする。しかし国政の過程で生じる措置の大部分は、統治に関する最も重要な一般原理(*leading general principles in government*)に関連し、あるいはそれに依拠するものである。したがって、もしある人が少なくとも十中八九その仲間と一致できないならば、彼は自己の政治集団

(political company)の選択に関して特別に不運であったと言わねばならない。もし彼が、政党結成の基礎となるべきこの一般原理、その適用に当っては必然的に全員の一致協力を要請するこの原理に協力できないならば、彼は初めから別の、彼の見解にもっと近い政党を選択すべきであったのである<sup>(61)</sup>。」

なるほど、バークは政党を「特定の原理」と「国家的利益の促進」に基礎づけながらも、それらの具体的内容についてはほとんど言及しておらず、その点で、バークの政党の定義は今なお曖昧さを残している。否そればかりか、彼の定義はあまりにも理想主義的であると言うべきかもしれない。しかし少なくともバークの考えた政党は、党としてとるべき明確な基本理念や基本方針を欠いて、官職や年金といった、利権を求めて抗争を繰り広げる単なる私党ないし徒党の如きものではなかった。またそれは、単一の政党でも、ボリングブルックのような政権掌握とともに消滅する一時的なものでもなかった。むしろバークの考えた政党は、複数のそれであり、恒久的存在としてのそれであった<sup>(62)</sup>。そのことは、これまでの引用文からすでに明らかであろう。またそのことは、「政党の価値がたとえどのようなものであれ、諸政党は常に存在してきたし、これからも存在し続けることであろう<sup>(63)</sup>」という、79年5月25日付シャクルトン宛書簡からも明瞭である。バークは政党論を展開するに当って、かつてのウィッグとトーリーのように、常に複数の政党の存在を前提とし、それら諸政党が恒常的に存在して、政権を求めて互いに競争し、互いに切磋琢磨することを理想とした。そして政権獲得後も政党は解体することなく、むしろ政党に導かれ、政党を基盤とした統治が行なわれることを良しとした<sup>(64)</sup>。その点で、バークの政党論は単なる党派的な政党擁護論ではなく、むしろそのような枠をはるかに超え出るものであった。そしてそれは、政党政治や二党制もしくは多党制といった主張を含み、あるいは少なくとも、そうした主張を予示しているという点において、明らかに近代政党論の先駆けとなるものであったのである。

ところで、このようにしてバークの政党論は大きな歴史的意義を有していることは疑いないとしても、我々は、彼の政党論をより一層深く理解するためには、それを彼の道徳論との関わりにおいても見ておく必要があるだろう。というのもバークにあって政党は、政治的観点からのみならず、人間本性をめぐる道徳的観点からも不可欠なものとして捉えられているからである。すなわち、バークが人間を有限なものとして捉え、それ故にあらゆる点で不完全な存在と看做していたこと、しかし人間は、精神的・倫理的共同体としての伝統的なイギリス憲法体制によって道徳的存在へと高まることができると考えていたことはすでに我々が考察した通りであるが<sup>(65)</sup>、バークによれば、実は政党も人間のそうした有限で不完全な本性と密接に関わって、そうした人間本性の限界性をかなりの程度克服することができるのであった。「結合を一切抜きにして、人間がいかにやっていけるかは私の理解を超えた事柄である。……『他人から全く離れている人間は、天使か悪魔のいずれかに違いない』という古いスコラの格言を想起する<sup>(66)</sup>」とバークは述べている。また71年11月のマーカム宛書簡でも、「人間の徳

性は、……有徳な人々との交わりの中で、互いに競争することによって最も良く高まることができる<sup>(67)</sup>」と語っている。パークにとって人間は、まさにゾーン・ポリティコンであった。人間は有限で不完全な存在ではあるが、他者と共に生活し、共に行動することによってこそ、自らを陶冶することができるのである。そして他ならぬ政党もまた、そのような陶冶の場として捉えられたのであった。彼は『ブリストル執行官への書簡』の中で次のように述べている。我々は、パークの政党論の道徳的側面をこの引用文からもある程度知ることができよう。

「私は人間としての自己の知性にあまりにも過大に依拠することを、つまり、自己の堅忍不拔と廉直へのキリスト教徒に相応しくない過信を決して正しいこととは考えていない。難局に逢着すればほとんど必ず馬脚を現わすあの偽れる過信とは、私は自分で無縁だと信じている。私は政敵と少なくとも同程度には、あらゆる点で多くの欠陥があることを知っている。私はそれに陥らぬための保証を見つけたいと思う。人間が本性的にも行動的にも腐敗から免れる上にこれまで常に効果的であった唯一の方法とは、諸君が生きている時代の最も有徳で公共的精神に富んだ人々と交わって、知恵を貸し合う慣習である。こうした交際は、これを維持すれば必ずや得るところがあり、これを捨てれば必ずや恥辱を招くものである。この行動規範を奉ずる私は、そのために政党人（party man）と悪しざまに呼ばれるかもしれない。しかし私自身は、この種の悪罵中傷に決してひるみはしない。世に政党と呼ばれる方法によって、私は諸君の父祖の憲法を崇拝する者であり、自己のこの政治的交わりを露ほども恥じないであろう<sup>(68)</sup>。」

このようにして、パークは政党を単に政治的観点のみならず、道徳的観点からも不可欠なものとして捉えた。彼にとって政党は政治的手段であるとともに、それ以上のものであった。政治家は政党に参加し、そこで活動することによって、自己の政治的・道徳的能力をより良く発達させることができるのである<sup>(69)</sup>。そして政治を政治固有の観点からだけではなく、道徳的観点からも捉えていくのが、パーク政治思想の本質に他ならなかった。そのことは、我々の今後の考察の中でより一層明瞭になっていくであろうが、いずれにせよパークは、政党を政治的・道徳的根拠から正当化したのであった。そしてそうした理由に基づいて、彼は政党政治や二党制もしくは多党制の必要性を説いたのであり、しかもそこにこそ、彼の政党論の、そして『現在の不満』の最も大きな歴史的意義があったのである。

## 注

- (1) *Political Register*, 1770, p. 345.
- (2) Cf. William B. Todd, *A Bibliography of Edmund Burke* (Suffolk : St Edmundsbury Press, 1982), pp. 73-75.
- (3) Charles O'Hara to Burke (10 May 1770), *Edmund Burke, New York Agent, with His Letters to the New York Assembly and Intimate Correspondence with Charles O'Hara, 1761-1776*, ed. by Ross J. S.

- Hoffman (Philadelphia: The American Philosophical Society, 1956), p. 462.
- (4) Burke to Charles O'Hara (21 May 1770), *The Correspondence of Edmund Burke*, ed. by Thomas W. Copeland et al., 10 vols. (Cambridge: University Press; Chicago: The University of Chicago Press, 1958-78), vol. II, p. 139.
- (5) *Ibid.*, pp. 139-40.
- (6) Catherine G. Macaulay, *Observations on a Pamphlet, entitled, Thoughts on the Cause of the Present Discontents* (London: Dilly, 1770), pp. 7, 19-24.
- (7) Cf. Simon Maccoby, *English Radicalism, 1762-1785 : The Origins* (London : George Allen & Unwin Ltd., 1955) ; Ian R. Christie, *Wilkes, Wyvill and Reform : The Parliamentary Reform Movement in British Politics, 1760-1785* (London : Macmillan, 1962) ; Edward Royle and James Walvin, *English Radicals and Reformers, 1760-1848* (Lexington : The University Press of Kentucky, 1982).
- (8) 例えば我々は、次のような文言の中にその事例を見出すことができよう。「民衆とその支配者との間のような抗争においても、少なくとも半分は民衆の側の言い分にも理があるはずのものである。」(Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, in *The Writings Speeches of Edmund Burke*, ed. by Paul Langford et al., 12 vols [Oxford : Clarendon Press, 1981-], vol. II, p. 255. 中野好之訳『現代の不満の原因を論ず』〈『エドモンド・バーク著作集』(1)〉(みすず書房, 1973年), 197頁。)[「民衆の手による為政者の選出および民衆による報賞と栄誉の配分は、自由な国家の第一義的長所の一つである。」(*Ibid.*, p. 278. 邦訳, 224頁。)]
- (9) 初期バークの民衆観と民主主義批判については、拙著『バーク政治思想の形成』(御茶の水書房, 1989年), 319-22頁参照。
- (10) Horace Walpole to Horace Mann (6 May 1770), *The Yale Edition of Horace Walpole's Correspondence*, ed. by W. S. Lewis (New Haven : Yale University Press, 1967), vol. XXIII, p. 209.
- (11) Burke to Richard Shackleton (ante 15 August 1770), *Burke's Correspondence*, vol. II, p. 150.
- (12) チャタムは、『現在の不満』が刊行された頃、短期議会制に対して未だ反対の立場をとっていた。(Correspondence of William Pitt, Earl of Chatham, ed. by W. S. Taylor and J. S. Pringle [London : John Murray, 1839], vol. III, p. 464, note ; The Duke of Richmond to Burke [10 June 1770], *Burke's Correspondence*, vol. II, p. 142 ; Burke to Richard Shackleton [ante 15 August 1770], *ibid.*, p. 150.) しかし時が経つとともに次第に短期議会制案に理解を示し(The Earl of Chatham to the Earl of Shelburne [22 April 1771], *Correspondence of Chatham*, vol. IV, pp. 156-57), 71年5月の上院では、大きくなった国王権力から憲法を守るためには議会の会期を現行の七年制から三年制に変えるべきことを主張している。( *Ibid.*, pp. 174-75, note.)
- (13) Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, in *Writings*, vol. II, p. 315. 邦訳, 272頁。
- (14) *Ibid.*, p. 318. 邦訳, 276頁。
- (15) The Earl of Chatham to the Marquis of Rockingham (15 November 1770), George Thomas, Earl of Albemarle (ed.), *Memoirs of the Marquis Rockingham and his Contemporaries* (London: Richard Bentley, 1852), vol. II, p. 194.
- (16) Horace Walpole, *Memoirs of the Reign of King George the Third*, ed. by G. F. Russell Barker (New York: Books for Libraries Press, 1970), vol. IV, pp. 86-90.
- (17) Thomas May, *The Constitutional History of England since the Accession of George the Third, 1760-1860* (London: Longmans, Green & Co., 1889), vol. I, pp. 12-13.

- (18) William E. H. Lecky, *A History of England in the Eighteenth Century* (London : Longmans, Green & Co., 1882), vol. III, pp. 98-99.
- (19) Lewis B. Namier, "The Character of Burke," *The Spectator* (19 December 1958), p. 895.
- (20) *Ibid.*
- (21) Lewis B. Namier, "Monarchy and the Party System," in *Personalities and Powers* (London : Hamish Hamilton, 1955), p. 21.
- (22) Lewis B. Namier, *England in the Age of American Revolution*, 2nd edn. (London : Macmillan, 1961), p. 161. さらにネーミアは次のようにも述べている。「ジョージ三世は、彼自身が公に選任した閣僚を通してではなく、『国王の友』という、邪悪で闇に包まれた秘密の団によって支配しているとして非難された。……けれどもそれは、パークの豊かな想像力によって美しく入念に作り上げられた虚構の物語であった。にも拘らず、この物語はロッキンガム派の信じるところとなり、彼らに取りついて離れなかった。」(Namier, "King George III : A Study of Personality," in *Personalities and Powers*, p. 43 ; Idem, *Crossroads of Power : Essays on Eighteenth-Century England* [London : Hamish Hamilton, 1962] , p. 127.)
- (23) John Brooke, *The Chatham Administration, 1766-1768* (London : Macmillan, 1956), pp. 232-33. ブルックは、別な個所でこうも述べている。「パークは1770年に刊行した『現在の不満』の中で、ジョージ三世が即位して以降、ある企てがなされてきたと主張した。その企てとは、『外面的内閣から全く切り離され、それとは全く無関係な』宮廷派徒党によって、また下院の『国王の友』の一派によって、憲法にとらわれることなくそれに反して統治することであった。しかし歪曲されたパークのこの説は、無意識の願望を現実へと投影しがちな精神の産物であった。そして現在の不満の原因とは、首相の地位を保持し損なったロッキンガムの不満に他ならなかった。」(Namier and Brooke [eds.] , *The History of Parliament : The House of Commons, 1754-1790* [London : HMSO, 1964] , vol. II, p. 148) さらに I・R・クリスティ(Ian R. Christie)も、次のように語っている。「18世紀には特殊な神話があった。すなわち、『国王の友』と『二重内閣』というロッキンガム派の概念である。……パークの最大の強みは想像力であった。これなくして天才はあり得ない。しかし想像力は手に負えないもので、それを制御するための強い監督者が必要である。けれどもパークには必ずしもそれが備わっていなかった。……ジョージ三世の初期の治世における政治制度の分析が示しているように、パークはこの想像力によって道を誤ってしまった。」(Ian R. Christie, *Myth and Reality in Late-Eighteenth-Century British Politics and Other Papers* [London : Macmillan, 1970] , pp. 28-31.)
- (24) Cf. *Writings*, vol. II, p. 17, editor's Introduction.
- (25) Burke to the Marquis of Rockingham (29 October 1769). *Burke's Correspondence*, vol. II, p. 101.
- (26) Cf. John Brewer, "Party and the Double Cabinet : Two Facets of Burke's Thoughts," *The Historical Journal*, vol. XIV, no. 3 (1971), pp. 500-501.
- (27) Burke to Richard Shackleton (6 May 1770), *Burke's Correspondence*, vol. II, p. 136.
- (28) Burke to Charles O'Hara (21 May 1770), *ibid.*, p. 139.
- (29) Cf. *Writings*, vol. II, p. 249, editor's Preface.
- (30) Carl B. Cone, *Burke and the Nature of Politics : The Age of the American Revolution* (Lexington : University of Kentucky Press, 1957), p. 195.
- (31) Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, in *Writings*, vol. II, p. 258. 邦訳, 200-201頁。

- (32) Cf. Clara I. Gandy, "Edmund Burke and the Whig Historians," Ph. D. dissertation, The University of Tennessee, 1973, pp. 103-104.
- (33) Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, in *Writings*, vol. II, pp. 275-76. 邦訳, 221頁。
- (34) Frank O'Gorman, *The Rise of Party in England : The Rockingham Whigs, 1760-82* (London: George Allen and Unwin Ltd., 1975), p. 264.
- (35) Cf. John Plamenatz, *Man and Society : A Critical Examination of Some Important Social and Political Theories from Machiavelli to Marx* (London: Longmans, Green & Co., 1963), vol. I, p. 335. 藤原保信他訳『近代政治思想の再検討』(III)(早稲田大学出版部, 1978年), 6頁。
- (36) Cf. Caroline Robbins, "Discordant Parties : A Study of the Acceptance of Party by Englishmen," *Political Science Quarterly*, vol. LXXIII, no. 4 (1958), p. 507.
- (37) Cf. Namier, *England in the Age of the American Revolution*, p. 51.
- (38) Cf. Plamenatz, *op. cit.*, p. 336. 邦訳(III), 7頁。
- (39) ボリングブルックはこう語っている。「すべての市民社会にはどこかに絶対的な権力がなければならぬ。それが一人の人間に委ねられる場合には君主政が、より多くの人々に委ねられる場合には、貴族政もしくは民主政が生じる。そしてそれがこれらすべての間で分割されると、混合政体という四者のうちで最善と考えられるものが生じる。」(Henry St. J. Bolingbroke, *Fragments or Minutes of Essays*, in *The Works of Lord Bolingbroke* [New York : Augustus M. Kelley, Bookseller, 1967], vol. IV, p. 193.)「我が統治についての自由な憲法が、かくも長く損なわれることなしに維持されてきたのは、君主の権力、貴族の権力、そして民衆の権力が混合し、一つの体系に融合して、これら三つの身分が互いに均衡しているからである。」(Bolingbroke, *A Dissertation upon Parties*, in *The Works of Bolingbroke*, vol. II, p. 119.)
- (40) 「諸君が行なっている反対(opposition)は、単に悪しき国政運営に対する反対だけではない。それは、我が国の憲法と矛盾して、あらゆる自由を破壊するような手段を行使し、そのような原理を確立し、そのような慣行を導入しようとする政府に対する反対でもある。諸君は現在の悪と戦うだけではない。そうした悪が諸君と諸君の子孫に対して及ぼす影響とも戦う。もし諸君がこの戦いを止めるならば、諸君は大義を失うことになるし、あらゆる機会に自らの主張を繰り返さない者は、自らの権利を失うかもしれない。このことを忘れるべきではない。」(Bolingbroke, *A Letter on the Spirit of Patriotism*, in *ibid.*, p. 364.)
- (41) Bolingbroke, *The Idea of a Patriot King*, in *ibid.*, p. 404.
- (42) Bolingbroke, *A Dissertation upon Parties*, in *ibid.*, p. 48.
- (43) Bolingbroke, *The Idea of a Patriot King*, in *ibid.*, p. 401.
- (44) Cf. Harvey C. Mansfield, Jr., *Statesmanship and Party Government : A Study of Burke and Bolingbroke* (Chicago : The University of Chicago Press, 1965), p. 11.
- (45) Cf. Giovanni Sartori, *Parties and Party Systems : A Framework for Analysis* (Cambridge : Cambridge University Press, 1976), vol. I, p. 7. 岡沢憲英・川野秀之訳『現代政党学』(1)(早稲田大学出版部, 1980年), 10頁。
- (46) Cf. H. N. Fieldhouse, "Bolingbroke and the Idea of Non-Party Government," *History*, vol. XXIII (June 1938), pp. 41-56.
- (47) Bolingbroke, *A Dissertation upon Parties*, in *The Works of Bolingbroke*, vol. II, p. 11.
- (48) Sartori, *op. cit.*, p. 7. 邦訳(1), 11頁。
- (49) David Hume, "Of the Coalition of Parties," in *Essays Moral, Political and Literary*, in *The Philosophi-*



- cal Works of David Hume*, ed. by Thomas H. Green and Thomas H. Grose (Darmstadt : Scientia Verlag Aalen, 1964), vol. III, p. 464. 小松茂夫訳『市民の国について』(岩波書店, 1982年), 160頁。
- (50) Cf. Mansfield, *op. cit.*, p. 15. 小松春雄『イギリス政党史研究——エドモンド・バークの政党論を中心に——』(中央大学出版部, 1983年), 126頁参照。
- (51) ヒュームによれば, 抽象的で思弁的な原理に基づく党派は近代に特有のものであり, それは, 「これまで人間事象に現われたものの中で最も異常で, 最も不可解な現象」であった。Hume, “Of Parties in General,” in *The Philosophical Works of Hume*, vol. III, p. 130. 邦訳(下), 177頁。
- (52) *Ibid.*, pp. 127-28. 邦訳(下), 172-73頁。
- (53) なお, バーク以前の政党論としては, ボリングブルックやヒューム以外にも, J・S・バリントン(John S. Barrington)やE・スペルマン(Edward Spelman)たちのそれがある。その点については, cf. J. A. W. Gunn, “Party before Burke : Shute Barrington,” *Government and Opposition*, vol. III, no. 2 (1968), pp. 223-40 ; Idem, *Factions No More : Attitudes to Party in Government and Opposition in Eighteenth-Century England* (London : Frank Cass, 1972), pp. 61-77, 151-53 ; Peter Campbell, “An Early Defence of Party,” *Political Studies*, vol. III, no 2 (June 1955), pp. 166-67 ; 小松前掲書, 108-10, 126-29頁参照。
- (54) Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, in *Writings*, vol. II, p. 315. 邦訳, 273頁。
- (55) Burke, *Observations on a Late State of the Nation*, in *ibid.*, p. 110.
- (56) Burke, *Speech on Conciliation with America*, 1775, in *The Works of the Right Honorable Edmund Burke*, 4th edn. (Boston : Little, Brown, & Co., 1871), vol. II, pp. 177-78. 中野好之訳『植民地との和解決議の提案に関する演説』〈『著作集』(2)〉, 165頁。
- (57) Burke to the Earl of Charlemont (9 August 1789), *Burke's Correspondence*, vol. VI, pp. 9-10.
- (58) Burke, *Letter to the Sheriffs of Bristol*, 1777, in *Works*, vol. II, p. 239. 中野好之訳『アメリカ問題に関してブリストル執行官への書簡』〈『著作集』(2)〉, 220頁。
- (59) Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, in *Writings*, vol. II, p. 317. 邦訳, 275頁。
- (60) Cf. Mansfield, *op. cit.*, 16 ; 小松前掲書, 126頁参照。
- (61) Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, in *Writings*, vol. II, p. 319. 邦訳, 278頁。  
バークにとって重要なのは, 原理を持っているかどうかであって, 一定の原理の上に立脚している政党ならば, たとえ考え方が異なろうとも, 彼にとっては尊敬の対象であった。そのことは, 次の言葉からも明らかであろう。「私はウィッグの原理とトーリーの原理に大いなる敬意を払う。なぜならば, 私は何らかの原理を持っている人々を尊敬するからである。」(Burke, *Speech on Wilkes's Privilege*, in *Writings*, vol. II, p. 101.)
- (62) Cf. Richard Hofstadter, *The Idea of a Party System : The Rise of Legitimate Opposition in the United States, 1780-1840* (Berkeley : University of California Press, 1969), pp. 29-34.
- (63) Burke to Richard Shackleton (25 May 1779), *Burke's Correspondence*, vol. IV, p. 79.
- (64) F・オゴーマン(Frank O'Gorman)は, バークは政党と反対党を同一視し, 反対党が政権をとれば, ボリングブルックと同様, もはや政党として存続する必要はないと考えていたと解釈している。しかしこのような説は首肯できない。Frank O'Gorman, “Party and Burke : The Rockingham Whigs,” *Government and Opposition*, vol. III, no. 1 (Winter 1968), pp. 95-96 ; Idem, “Edmund Burke and the Idea of Party,” *Studies in Burke and His Time*, vol. XI, no. 2 (Winter 1969-70), p. 1439 ; Idem, *Edmund Burke : His Political Philosophy* (London : George Allen & Unwin Ltd., 1973), p. 32 ; Idem, *The Rise of Party in England*, p. 269.

- (65) 前掲拙著, 251頁以下参照。
- (66) Burke, *Thoughts on the Cause of the Present Discontents*, in *Writings*, vol. II, p. 320. 邦訳, 279頁。
- (67) Burke to Dr. William Markham (post 9 November 1771), *Burke's Correspondence*, vol. II, p. 263.
- (68) Burke, *Letter to the Sheriffs of Bristol*, in *Works*, vol. II, pp. 238-39. 邦訳, 219-20頁。
- (69) Cf. O'Gorman, *Edmund Burke*, p. 35.

〈付記〉 本稿は, 1991年度岐阜教育大学研究助成による研究成果の一部である。